

京市の電車のみならず他の都市の電車に於ても蓋し同様であらうと思ふ。

道路費用負擔に付て疑問を提供して諸彦の御判斷を乞ふ。

## 道路公債發行の急務

中 川 正 左

現内閣は其政綱の一として非募債主義を高調して居たのであるが、昭和六年度に於て、失業救済の目的で二千二百萬圓の道路公債と千二百萬圓の鐵道公債とを發行することに閣議で決定したといふ。而して此道路公債は道路公債法によつて發行するもので、國道の改良と國道及び府縣道の改良費補助に使用せらるゝものであるといふ。

元來道路公債と鐵道公債とは共に交通事業の發展を目的として發行するものであつて、其目的とする處何れも一國交通網の完成を期するに在るのであるから、現政府が從來の非募債主義に囚はれないで先づ以て是等二種の公債募集を目論むことは時節柄誠に當を得て居るものであると思ふ。

論者或は非募債主義の現内閣が道路公債及び鐵道公債の發行を爲すのを見て、直ちに非募債主義の破綻であると評するのは果して當を得たものであらふかどうか？

鐵道公債も道路公債も共に生産的公債であつて、他の軍事公債其他の公債の如き不生産的のものではない。従て若し公債の内、此生産的のものをも募債せずといふならば、之れは明かに終始一貫せる非募債主義であるが、現内閣でも當初から此の如き極端なる非募債主義ではなく、生産的の公債ならば幾分が募集を是認して來た様である。即ち鐵道公債の如きは前内閣案よりも半減はしたが兎に角半分の四千萬圓丈の發行は認容したのである。だから今失業者を救済する爲主として大都市附近の道路や鐵道の土木工事を起し多くの失業者を救済せんとするならば、之れ所謂一石二鳥の政策であつてたとひ幾分か變説改論の非難は免れないにしても、之を實行せざるに萬々勝るものであるかと思ふ。此の點に付き現内閣が失業救済の爲めなりとはいへ幾分なりとも非募債主義を緩和したのは寧ろ一大進歩であると評して可なりと信ずるのである。

抑も陸上交通は鐵道と道路との二者によりて開發せられたり又は發展して行くものである。而して鐵道の建設と改良に付ては鐵道特別會計の運用によりて先づ以て鐵道益金を資本勘定に繰入れて之を建設改良費に投じ尙ほ不足するときは鐵道公債を發行して之に充當するのであるが、近頃では財界の不況によりて鐵道益金が頗に激減して、益金のみでは到底鐵道の必要な改良工事丈けをも遂行することが出来ない様な状態になつて居る。況んや益金を建設工事に振向ける杯と云ふことは全然不可能なことである。そこで鐵道公債を發行して先づ建設工事を遂行し次に必要な改良工事にも此公債財源を振り向けて大都會附近の改良工事を實施せんとして居るのである。

道路殊に國道の改良や國道府縣道の改良費補助についても亦一般租稅收入ばかりで支辨せんとすることは、恰も木に攀つて魚を求むるが如きもので、到底急速に充分に其目的を達成することが出來ないのである。そこで之が緩和助長策として公債即ち道路公債を發行して財源を作り之によりて道路改良費や補助費を支辨せんとするのは誠に止むを得ないことであると信ずる。

鐵道公債と云ひ或は道路公債と云ふ交通政策から見ると、共に國家交通の發展に寄與せんとするものである。此意味から云ふと鐵道敷設法に定むる豫定線路の建設に鐵道公債を充當するのと同じ筆法で、道路交通政策上必要なる資金を公債財源に求むることも亦緊急止むを得ざるものであると思ふ。元來鐵道敷設法に定むる豫定鐵道線路と道路の幹線である路線とは之を同一省例へば交通省で統一を爲すことが合理的であり、之を法律で規定するならば同一の法律例へば道路鐵道網豫定法とも云ふべきもので兩者を綜合統一して規律すべきものであつて鐵道は鐵道、道路は道路といふが如く個々別々な法制を以て之を律せんとすることは既に時勢の進運に伴はないもので交通政策上合理的でないのである。此の點から見て鐵道會議或は道路會議といふが如き單獨な會議も亦最早時世の進運に適應せざるものであつて、交通事業の合理化は先づ以て道路と鐵道とを打つて一丸とした交通省の下に交通法により交通會議に諮詢して統一的に監督し統制し規定し及び評議すべき筋合のものであると思ふ。之を要するに鐵道又は道路公債の發行は一國の交通網完成上最も望ましきものであつて、此等二種の公債は他の不生産的公債と別途に詮議し多々益々發行額を増加

して行くべきものであつて、積極的に交通網完成の爲め大に支出することは私の賛意を表する所である。

道路改良會にては曩きに道路の改良事業促進方に付き内務鐵道兩大臣に建議書を提出したのであるが其理由の一として失業救済の目的を達する手段としても道路の改良が最も適切であることを具陳したのであるが、此の建議案の趣旨を政府に於て幾分が認容せられ、今日失業救済の爲道路公債を發行せんとするに至りたることは、道路改良會としても亦大に満足して可なることであらふと思ふ。

## 道路の進歩に就て

藤原俊雄

道路の進歩に就ては我國文化施設の中最も注意の行届かなかつた一つであつて、多年の間道路を舗装するといふが如きことは國民の夢にだも想ひよらなかつたことである、それは國民の履物が西洋各國のそれと異り、その生活様式住宅の内容が孤獨的であつたといふことが大きな原因であつたらうと思ふ。併し近來段々生活の模様も歐米化して來た結果一般公衆も稍々理解が付いて、各都市